



ブループラネットを後世に

田中鐵二 Tetsuji TANAKA

公益財団法人 旭硝子財団 理事長



地球環境問題の解決に大きく貢献した個人や組織を称え旭硝子財団が贈る地球環境国際賞ブループラネット賞の昨年度の授賞式は、秋篠宮同妃両殿下ご臨席の下に平成24年10月31日に挙行されました。受賞者はウィリアム・E・リース教授（カナダ）とマティス・ワケナゲル博士（スイス）の師弟コンビと、トーマス・E・ラブジョイ博士（米国）のお三方でした。前者の師弟コンビは、環境指数として最近各国の環境レポートなどに取り上げられることが多くなった『エコロジカルフットプリント』という概念を創出し、人類が1年間生きて活動してゆくために消費する自然資源の量をフットプリント（足跡）から想起されるグローバルヘクタール（gha）という面積を単位として表し、これをその土地が供給できる自然資源量（バイオ・キャパシティー）と比較することで、世界各国の自然資源に対する需要と供給の関係を明らかにしました。その結果、人類の資源に対する需要は供給を50%以上上回り、2008年で見ると、人類が消費したものを自然が再生産するためには1年6ヵ月も要するというように、すでに地球はサステナブルでない状態にあります。日本は2.6倍、米国は4.4倍といったように、ほとんどの先進国は自然回復・自浄可能な収支を大幅に上回る過剰消費の状態にあります。また後者のラブジョイ博士は、1960年代からブラジルのアマゾン熱帯雨林に入り、渡り鳥の観測等生態系に関する実地調査を続け、「種」の減少を食い止め生物多様性を維持するためには、一定規模以上の広さの分断されていない生息地が必要であることを立証し、乱開発の抑制に対する科学的根拠や大規模な自然公園や自然保護区の設計及び管理に関する有益な指針を示しました。「生物多様性」という言葉もラブジョイ博士によって初めて提唱されたものであります。

旭硝子財団は、80年前に大学の化学関係の先生方への研究助成を始めたのが、そもその発端であります。以降、自然科学全般、さらには人文・社会科学へと助成の対象を拡大してまいりました。そして20年ほど前から、青い地球が後世にキチンと申し送られますように、人々が真の豊かさを享受できる社会が実現しますように、いささかでもお役に立ちたいと念じて、これらに貢献された個人や組織に対して毎年2件ブループラネット賞を贈賞しております。

「化学と工業」誌を私が最初に手にしたのは半世紀以上前の学生時代になります。その後、「化学」あるいは「化学物質」という言葉は、何か環境汚染の代名詞のようにいわれた時期もありました。しかし世の中に化学品ではないものは存在しないわけでありますから、「化学」による地球環境の復旧を心底期待する次第です。ノーベル賞の根岸先生が日経の「私の履歴書」に書いておられますように、化学の発明、発見による地球環境負荷低減への貢献、いわゆる「グリーンケミストリー」によって、青い地球を子々孫々に申し送るために、力を貸していただきたいと念じております。その実現のため、我々財団が少しもお役に立つことができればと常日頃微力を尽くしている次第です。

© 2013 The Chemical Society of Japan